

ロサンゼルス奄美出身者の移住と生活

田 島 康 弘

(1993年10月15日 受理)

Amami Migrants in Los Angeles

Yasuhiro TAJIMA

第1章 研 究 目 的

本稿は、現在ロサンゼルスに居住し生活する奄美出身者の移住のプロセスおよびその後の生活確立過程を、当事者自身からのききとりやアンケート調査等に基づいて、できるだけ明らかにしようと試みたものである。

筆者はこれまで奄美研究の一環として、奄美出身者の動向に関心を持ち、彼等の移住のプロセスや都市部における居住と生活さらには集団形成状況等について、いくつかの報告を行ってきた¹⁾。本稿は、こうした一連の研究の一部をなすものである。

移住に関する研究は、これまで人口学、経済学、社会学、地理学などの諸分野から行われてきたが、筆者の立場は「空間における社会現象²⁾」を研究対象とする社会地理学的立場からのアプローチである。

アイルズによれば、近年の社会地理学的研究は、レレバンス革命³⁾をへて「社会問題の地理学」的色彩を強めているという。今ここで、彼が整理する現代における社会地理学の3つの潮流⁴⁾を筆者なりに解釈すると、以下のようなになるだろう。すなわち、第1の潮流は社会福祉の現状などを諸指標を使って検討するパターン識別的研究であり、第2は社会問題のパターン分析からプロセスや原因追究の方向へと進んでいる潮流であり、第3は社会集団毎の空間認識の相違に注目し、認識的・主観的側面を強調する潮流である。

ところで、ここで言う「社会問題」ないし「社会問題の地理学」の具体的内容は、「人種・健康・犯罪・貧困・汚染」のような現象に関する研究の増大が見られるということであり、これらの研究がとりわけ第2の潮流の方向で行われてきており、本研究もこうした研究動向や分析方法を考慮しつつ進められている。

ただ、本研究はあくまでも事実の把握それ自体を主たる目的としており、社会地理学方法論の検討を中心に論じたものではない。日本においては、社会地理学的研究そのものがきわめて不十分であ

り、こうした中では、現実を対象とした分析が更に積み重ねられる必要があると筆者は考えている。

第2章 アメリカ合衆国の奄美出身者

第1節 アメリカ全土の奄美出身者

1989年3月、筆者はアメリカ合衆国に居住する奄美出身者を尋ねてアメリカに渡った。事前に得られた情報は、鹿児島県庁における情報と、喜界島小野津出身者により作成された「年輪⁵⁾」など奄美郷友会関係からの情報の2つであった。

県庁では、アメリカのいくつかの都市における鹿児島県人会の存在と各会長氏の住所や電話番号等の連絡先を知ることができた。県人会の存在する都市はロサンゼルス、シアトル、シカゴ、サンフランシスコ、サンディエゴおよびハワイのホノルルとヒロとであったが、このうちサンフランシスコ、サンディエゴ及びハワイに行くことは出来なかった。残りの3都市の県人会々長氏には直接面接し、奄美出身者の所在を尋ねたが、シアトルでは全く思い当たらないということであり、シカゴでも数年前に1人いたが、今はその人とも音信不通でその他にはいないということであり、さらに、ロサンゼルスの場合も、会長氏からの手掛りはほとんど得られなかった。

また、県庁には「南加州鹿児島県人史」(1975年発行)が存在し、この中の名簿から、1974年現在のロサンゼルス及びその周辺の市郡別出身数がわかる。これによると、県内で出身者の多い地方は、川辺郡の138名、指宿郡の90名、日置郡の40名、始良郡の23名などであり、大島郡からの出身者はわずか2名が記載されているにすぎなかった。しかし、このうちの1人(A. K. 氏)との面接により、筆者はロサンゼルス奄美会の存在を知ることができたのである⁶⁾。

次に、「年輪」に掲載されている「アメリカの小野津会」の各氏を頼りに、あるいは鹿児島・東京などに居住する小野津関係者から得られた情報に基づいて、筆者はニューヨーク周辺及びロサンゼルスの奄美出身者を尋ねた。ニューヨークについては既に別稿⁷⁾で紹介したとおりで、フィラデルフィアのK氏、コネチカット州スタンフォードのN氏の関係者には面会してお話を伺うことができたが、アメリカ小野津会の名簿記載者の中で既に亡くなられた方も多く、会は自然消滅の状態であった。

他方、ロサンゼルスについては、小野津会としてではなかったが小野津出身者を中心とした「喜界島会」が存在していることを知ることができた。この「喜界島会」は、戦前から存在した小野津会の流れを汲むものと言うことができ⁸⁾、前述の「ロサンゼルス奄美会」とはそのルーツを異にしていて別個の存在であるが、これら両方の会に加入している会員も存在する。

第2節 ロサンゼルス奄美会

1989年3月の調査で、アメリカに居住する奄美出身者の全般的状況を調べた結果、ロサンゼルスに多くの奄美出身者が居住していることが判明したので、筆者は同年9月、ロサンゼルスに焦点を

定めて、再度渡米して調査を行った。

ロサンゼルス奄美会では会員名簿を整理していた。筆者は会の中心メンバーの A. K. 氏及び N. K. 氏から、新旧2つの名簿を譲り受けることができた。旧名簿には43名、新名簿には47名の名前が記入されていた。旧名簿にあって新名簿にない方（つまり、移動や帰国などをしたと考えられる方々）が7名おり、逆に旧名簿になくて新名簿で新たにつけ加わった方が11名いて、双方の名簿ともに記載されている方は36名であった。両名簿の作成年は不明であるが、新名簿はごく最近と考えてよいようである。そこで、この新名簿を中心として、会員の状況についてわかる範囲で把握してみたい。

もちろん、ロサンゼルスに居住する奄美出身者のすべてがこの名簿に含まれているわけではなく、実際、筆者自信も名簿にない奄美出身者を知っているが、名簿以外の出身者がどの程度存在するかは判断する材料がないので、こうした限界を前提に、この名簿に依拠するしかないことをお断りしておきたい。

次に、名簿記載者の中で、1) 筆者が面会した会員（会の中で中心的な会員と考えてよいと思われる）、2) 名簿に住所が記載されている1) 以外の会員、3) 名簿に住所の記載のない会員、の3種類に分けて、男女別にその人数を示した（第2-2-1表）。男女別では女性の方が多く、6割以上を占めている。また、住所不明者が5名おり、住所のわかっている会員は42名であった。

次に、住所のわかっている42名の会員の居住分布をみた（第2-2-2表）。カウンティ（以下 Co. と略す）別では、ロサンゼルス Co. に19名、

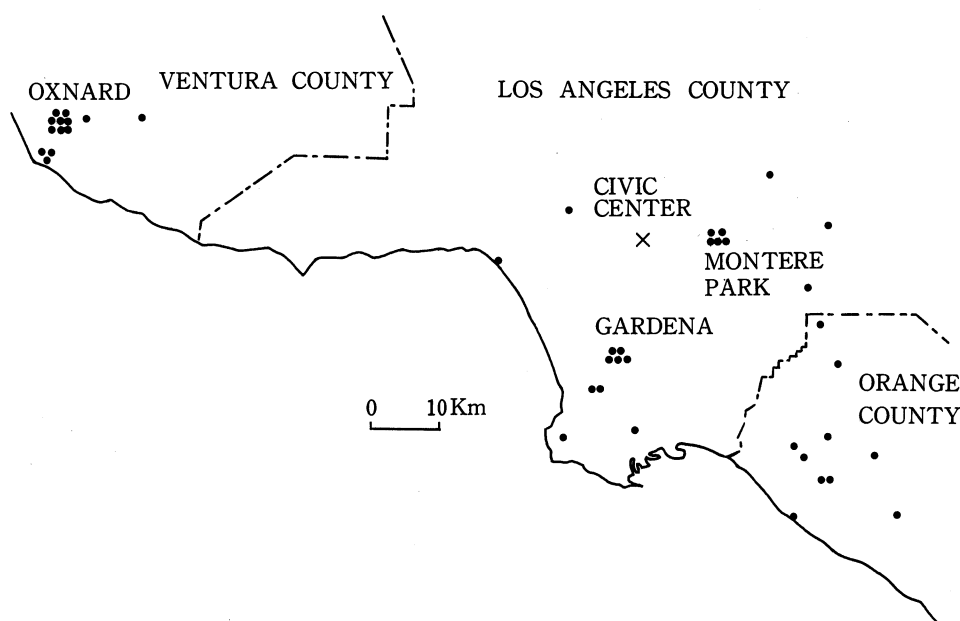
	男	女	計	割合(%)
筆者が面会した会員	9	0	9	19.1
住所記載のある会員	8	25	33	70.2
住所記載のない会員	1	4	5	10.6
合 計	18	29	47	100.0
男 女 比(%)	38	62	100	

出所：会員名簿より筆者作成

カウンティ	男	女	計	割合(%)	カウンティ内の集中地区など
ロサンゼルス	10	9	19	45.2	ガーデナ5, モントレーパーク5, など
オレンジ	6	4	10	23.8	各地に分散
ヴェンチュラ	1	12	13	31.0	オックスナード8, ポートイメンヌ3, など
合 計	17	25	42	100.0	

出所：会員名簿により筆者作成

オレンジ Co. に10名、ヴェンチュラ Co. に13名であって、この3つのカウンティ内に全員が居住していた。また、男女別ではヴェンチュラ Co. で特に女性が多いことが目立っている。また、これら各カウンティ内の集中地区をみると、ロサンゼルス Co. ではガーデナの5人をはじめとした南部方面に9人と1つの中心があり、また、モントレーパークの5人をはじめとした東部方面に8人ともう1つの集住地区があると言えそうである。また、ヴェンチュラ Co. ではオックスナードを中心とした地区にはほぼ集中しているが、オレンジ Co. では中西部にやや多いものの、どちらかと言うと分



第2-2-1図 ロサンゼルスにおける奄美出身者の居住分布

散的であると言えよう。

以上を全体としてみると、奄美会員の集住地区は、①ロサンゼルス南部、②ロサンゼルス東部、③オックスナード、④オレンジ中西部の4ヵ所であるとまとめることができよう。以上を分布図に示しておく(第2-2-1図)。

新名簿の内容は氏名と住所および電話番号だけであるが、旧名簿には奄美の出身地の市町村名が一部記載されていた。そこで次に、彼等の出身地について整理した。その際出身地不明者については、後述する筆者が行ったアンケートの結果やききとり等からわかったことなどもあわせて利用し、整理を行った(第2-2-3表)。

結果は名瀬市と竜郷町の出身者が多いことを示している。とくに女性にこの傾向が顕著である。以上を反

映して、島別にみても奄美大島出身者が7割以上を占めており、以下、徳之島、沖永良部島、喜界島の順ではあるが、これらの島々からの出身者の数は少なく、与論島出身者は0であった。

男性については笠利・竜郷地区にやや多いと言えるかも知れないが、他との差が大きいとも言え

第2-2-3表 奄美会員の出身地

出身地	男	女	計	割合(%)
笠利町(大島)	3	1	4	11.1
竜郷町(〃)	3	5	8	22.2
名瀬市(〃)	1	10	11	30.6
瀬戸内町(〃)	2	1	3	8.3
喜界町(喜界島)	1	1	2	5.6
徳之島町(徳之島)	1		1	2.8
天城町(〃)	2		2	5.6
伊仙町(〃)	1	1	2	5.6
和泊町(沖永良部島)	2	1	3	8.3
小計	16	20	36	100.0
不明	2	9	11	
合計	18	29	47	

出所：新・旧名簿などから筆者作成

ず、全体として奄美の各地に分散していると見ることができよう。しかし、女性の場合は名瀬市と竜郷町に明らかに集中している。これは奄美が戦後8年間、米軍政下にあったこととの関連があるようで、当時の国際結婚により渡米された方々が少なからずいることの反映かと思われる。これに対し、男性の方の出身地の分散は、それぞれが新天地での開拓や新たな生活をめざして個々独立に様々な手段やルートで渡米したことの反映かと思われるが、具体的なことはアンケートの結果に譲りたい。

第3章 奄美出身者の移住過程とその後の生活

第1節 調査の方法及び内容

ロサンゼルスに居住する奄美出身者の移住や生活に関するより詳しい情報を得るため、筆者は、1989年9月から12月にかけて、前述した奄美会の全会員を対象に、面接による手渡し及び郵送によるアンケート調査を実施した。

調査対象者総数42名のうち、直接手渡し者は9名であり、残りの33名の方々には日本からアンケート用紙を郵送し、ロサンゼルス奄美会会長のN氏または筆者のところへ返送していただくという方法をとった。手渡しの方は、筆者のロサンゼルス到着直後に本人に面会して手渡しし、帰国までに回収するという方法であった。

調査の内容は、渡米時のこと、渡米前のこと、現在の仕事や居住、奄美会や郷里奄美との関係、生活や異文化社会の中での意見や考えなど、32項目、50余りの諸点であった。

調査の結果、最終的に回収し得た調査票は男性8名、女性6名、合計14名であり、回収率は33.3%であった。手渡しによる回収率は高かったが、郵送による場合の回収率が低かったのはやむを得ないことであろう。この結果から、全体的な傾向を論ずることはむずかしいかも知れないが、いくつかの傾向を伺い知ることはできるように思う。アンケートを整理した結果を以下で示したい。

第2節 渡米時のことについて

まずはじめに、渡米経過など渡米時点の事、渡米直後の居住や仕事さらに当時の困難等についてまとめて述べよう。

1) 渡 米 年

被調査者の渡米年についてみると、1960年代と70年代前半が最も多く、この前後の5年間でこれに次いでいて、これらでほとんどを占めている(第3-2-1表)。すなわち、大部分は日本経済の高度成長期の渡米者であるということになる。また、渡米年は同時に彼等の在米居住年数をも示しており、居住年数でみると、15年以上30年未満が最も多くなっている。既に、かなりの長期間に渡って居住していると言えよう。

2) 前 住 地

被調査者の渡米前の居住地をみると、東京が4割以上で最も多く、大阪を加えると3分の2近くになる。逆に、出身地の奄美は少ない(第3-2-2表)。この事は、彼等の渡米が奄美から直接ではなく、大都市部で一定期間居住した後、渡米したことを示している。

3) 同 伴 者

渡米の際に単独か、それとも同伴者がいたか否かについて尋ねた結果をみると、家族と一緒に2人いる他はすべて単独であり、基本的には一人で渡米している(第3-2-3表)。なお、家族と一緒に2人は、いずれも国際結婚をした者で、一人は夫と、もう一人は娘とであった。

4) 渡米の理由

被調査者の渡米の理由は、かなり多様であると言えよう(第3-2-4表)。内容をみていくと、「留学や専門の勉強のため」が最も多く、「家族や友人を尋ねて」が次いでおり、この2つで半数を占める。これらの理由は、はじめから永住を志したものではなく、なり行きの中で住みつくようになったものと言うことができるのではないだろうか。「出張で」の理由も、ここに含めることができよう。

これらに対し、「永住」や「一旗あげるため」は、はじめから目的がはっきりしており、また、「結婚」(国際結婚)も永住を前提としたものと見ることができよう。

つまり、全体として渡米の目的は多様であり、はじめから定住を目ざしていた者は、むしろ少なかったと言えよう。

第3-2-1表 渡 米 年

渡米年(居住年数)	男	女	計	割合(%)
1951-55(35-39)				
56-60(30-34)	1	1	2	14.3
61-65(25-29)	1	2	3	21.4
66-70(20-24)	3		3	21.4
71-75(15-19)	3		3	21.4
76-80(10-14)		2	2	14.3
81-85(5-9)		1	1	7.1
86-(0-4)				
計	8	6	14	100.0

出所：筆者のアンケート調査による、以下の表も同様

第3-2-2表 前 住 地

前 住 地	男	女	計	割合(%)
東 京	4	2	6	42.9
大 阪	1	2	3	21.4
宮 崎		1	1	7.1
鹿 児 島 ¹⁾	1		1	7.1
奄 美	2		2	14.3
沖 縄		1	1	7.1
計	8	6	14	100.0

注1) 奄美を除く

第3-2-3表 渡米時の同伴者

同伴形態	男	女	計	割合(%)
単身、1人で	8	4	12	85.7
家族と	0	2	2	14.3
計	8	6	14	100.0

第3-2-4表 渡 米 の 理 由

理 由	男	女	計	割合(%)
永 住	2		2	14.3
結 婚		2	2	14.3
一 旗 あ げ る	1		1	7.2
日本以上の収入	1		1	7.2
勉 強	2	2	4	28.6
家族・友人の訪問	1	2	3	21.4
出 張	1		1	7.2
計	8	6	14	100.0

5) アメリカでの知人の有無

渡米時点で、知人など頼りにし得る人がいたかどうかについてみると、誰もいなかった者は比較的少なく、家族や親戚または友人がいたとする者が多い（第3-2-5表）。しかし、誰もいなかったとする者もいて多様であり、全体として特定の傾向があるとは言えないように思われる。

6) 家の種類

渡米初期に居住した家についてみると、はじめから自分の持家に住んだ者も3分の1程いて少なくないが、多くは親戚、知人の家やアパート・貸家など仮の住いに住んだのであった（第3-2-6表）。なお、持家の中には両親がアメリカに住んでいた

7) 家探しの方法

未知の土地への移住者にとって、家探しは最も基本的に重要なことの1つである。そこでこの方法をみると、家族や友人に依存したケースが最も多く半数以上を占め、不動産業者や新聞広告など自力で探した者はずっと少ない（第3-2-7表）。頼りにし得る人の存在の重要性が示されていると言えよう。

8) 当時の仕事

渡米初期に行っていた仕事をみると、学生などで労働をしていなかった者もかなりいたが、これらを除くと、レストランや病院などのサービス関係の仕事が多かったと

言えよう（第3-2-8表）。また、庭園、造園などの庭師の仕事をしていた者もいるが、これは鹿児島県出身者全体の中できわめて多い仕事でもある。

9) 仕事探しの方法

仕事探しも、主婦や学生などを除くと、友人、知人の紹介によることが多く、新聞等をみて自分で

第3-2-5表 知人の有無

知人の種類		男	女	計	割合(%)
家族	親戚	1	2	3	21.4
友人	なし	1	1	2	14.3
	人	3	2	5	35.7
	し	3	1	4	28.6
計		8	6	14	100.0

第3-2-6表 家の種類

家の種類		男	女	計	割合(%)
自分の持ち家		3	2	5	35.7
親戚・知人の家		1	1	2	14.3
会社の寮		1		1	7.1
			1	1	7.1
貸家		1		1	7.1
アパート		1	2	3	21.4
安いホテル		1		1	7.1
計		8	6	14	100.0

第3-2-7表 家探しの方法

方法	男	女	計	割合(%)
家族・親戚による	1	3	4	28.6
友人・知人による	3	1	4	28.6
会社・大学で	1	1	2	14.3
不動産屋	2		2	14.3
新聞等(により自分で)	1	1	2	14.3
計	8	6	14	100.0

第3-2-8表 渡米初期の仕事

仕事	男	女	計	割合
庭園・造園	2		2	14.3
病院・美容院	1	1	2	14.3
オーディオサービス	1		1	7.1
レストランサービス	1	1	2	14.3
日雇い労働	1		1	7.1
主婦		1	1	7.1
学生・研修	2	3	5	35.7
計	8	6	14	100.0

探したケースは少ない (第3-2-9表)。

家探しと同様の傾向があると言えよう。

10) 渡米時点での困難

以上のほかの渡米時点における諸困難についてみると、一番多いのは言葉の問題で、半数の者がこれをあげている。次いで、ビザや市民権のないことなどの不安定な地位の問題があり、また、当初は「所持金が少なくなることほど心細いことはない」ため、仕事だけに専念したことなどが来ている (第3-2-10表)。

11) 言葉の克服

そこで、この言葉の困難にどのように対処し、どのように克服したかについてみると、「学校へ通った」者と「日常生活の中で自然に」克服した者とが半々程度であり、かなりの者が学校へ行ったことがわかる (第3-2-11表)。

12) 予想外だったこと

以上の他、渡米後に最も予想外と感じたことについて尋ねたところ、半数近くが「特にない」と答えているものの、これ以外は様々な事柄をあげており、新たな発見や自己の先入観の訂正を行っていることがわかる (第3-2-12表)。

これらの点は、移住経験によってはじめて知るうる、日米両国間の差異に関する貴重な内容を含んでいると言えるのではなかろうか。

第3節 渡米前のことについて

次に、誕生から渡米に至るまでの生活等についてみよう。

第3-2-9表 仕事探しの方法

方 法	男	女	計	割合(%)
友人の紹介	1		1	7.1
知人の紹介	2	2	4	28.6
新聞等(自分で)	2	0	2	14.3
会社からの出張	1	0	1	7.1
主婦・学生	2	4	6	42.9
計	8	6	14	100.0

第3-2-10表 渡米時点での困難

困 難 な 事 柄	男	女	計	割合(%)
言葉	4	3	7	38.9
仕事のための生活	2		2	11.1
不法滞在	3	1	4	22.2
ベトナム戦争での徴兵の心配	1		1	5.6
車社会の中での無免許		1	1	5.6
なし	1	2	3	16.7
計	11	7	18	100.0

注) 複数回答を含む

第3-2-11表 言葉の克服

克服の方法	男	女	計	割合(%)
学校へ通って	3	3	6	42.9
仕事を通して	1		1	7.1
日常生活で自然に	4	2	6	42.9
まだ克服していない		1	1	7.1
計	8	6	14	100.0

第3-2-12表 予想外だったこと

	男	女	計	割合(%)
日本で得たアメリカ知識の誤り	1		1	7.1
他人を気にしない個人の自由	1		1	7.1
土地の広さ	1		1	7.1
動植物が同じだったこと	1		1	7.1
米人の生活の慎ましさ		1	1	7.1
米人の怠慢、適当さ		1	1	7.1
日本の生活の普及		1	1	7.1
日本人がみな親戚みたいなこと		1	1	7.1
なし	4	2	6	42.9
計	8	6	14	100.0

1) 生年及び年齢

被調査者の生年をみると、1930年代後半から1940年代の者が64.2%と最も多い（第3-3-1表）。これを調査時点（1989年）での年齢でみると、30代後半から50代前半にかけての年齢層にほとんどの者が集中していることになり、働き盛りの者がほとんどであることになる（第3-3-2表）。

2) 誕生地

被調査者の誕生地をみると、大島、徳之島、沖永良部島、喜界島の順であり、これは島の大きさ（人口の多さ）にほぼ比例していると言えよう（第3-3-3表）。市町別により細かくみると、竜郷町や和泊町、伊仙町で多くなっているが、数が少ないため、戦前における喜界島小野津のような特別な集中地区が存在するとは言えない。ただ、被調査者だけでなく、奄美会の会員全体では、大島北部出身者が多いことは既にみたとおりである。

3) 子供の頃の記憶について

郷里での生活の一端を知る手掛りとして、子供の頃の記憶について尋ねたところ、半数近くは「なし」であったが、これを除くと、サンゴ礁の海岸で遊んだことや畑で家族と一緒に仕事をしたことなど、自然の中での生活のことをあげた者が最も多く、戦中、戦後の生活の苦労が次いでいた（第3-3-4表）。

4) 奄美以外での生活経験

奄美以外での生活の経験をみると、全員にその経験があった。その居住地で最も多かったのは関東であり、関西と鹿児島がこれに次いでいた（第3-3-5表）。すな

第3-3-1表 被調査者の生年

生 年	男	女	計	割合(%)
1921-25	1		1	7.1
26-30				
31-35		1	1	7.1
36-40	2	1	3	21.4
41-45	2	1	3	21.4
46-50	2	1	3	21.4
51-55	1	1	2	14.3
56-60				
61-65		1	1	7.1
66-70				
計	8	6	14	100.0

第3-3-2表 被調査者の調査時点での年齢

年 齢	男	女	計	割合(%)
26-30		1	1	7.1
30-35				
36-40	3	2	5	35.7
41-45	1	1	2	14.3
46-50	2		2	14.3
51-55	1	2	3	21.4
56-60				
61-65				
66-	1		1	7.1
計	8	6	14	100.0

第3-3-3表 被調査者の誕生地

誕 生 地	人 数	割合(%)
竜 郷 町(大 島)	3	21.4
名 瀬 市(〃)	1	7.1
瀬 戸 内 町(〃)	1(+1)	14.3
喜 界 町(喜界島)	(+1)	7.1
徳 之 島 町(徳之島)	1	7.1
天 城 町(〃)	1	7.1
伊 仙 町(〃)	2	14.3
和 泊 町(沖永良部島)	2(+1)	21.4
計	11(+3)	100.0

注) ()内の数字は生育地を示す。彼等の誕生地は和泊の1人がロサンゼルス、他の2人は大阪である。

第3-3-4表 子供の頃の記憶

記 憶	人数	割合(%)
海、畑など自然の中の生活・あそび	4	28.6
戦中、戦後の苦難	2	14.3
日本復帰	1	7.1
9才で帰国したので言葉	1	7.1
な し	6	42.9
計	14	100.0

わち、多くの者が都市部とくに大都市部へ移住したことがあるのである。

そこで次に、彼等がいつ頃、何のために奄美を離れたのかについて延べ数でみると、年齢は20代11件、10代11件、9才以下及び30代が1件づつとなり、10代と20代に多い。また、目的では学生としてが16件、仕事のためが8件であり、学生としてが多い。すなわち、10代～20代のときに学生として出た者が多いことになる。

5) 渡米の契機

次に、渡米の気持を育てた事柄、あるいは直接の契機となった事柄等についてみると、勉強や収入など直接的な契機をあげた者は少なく、多くの者が自分のまわりの環境的事柄について述べていることが印象的である(第3-3-6表)。ただ、こうした環境を本人が受けとめて現実化した点が重要なであろう。

6) 日本に関する記憶

最後に、渡米前の日本に関する記憶で印象に残っている事について尋ねた結果をみると、半数近くは「なし」と答えているが、これを除くと「奄美の自然や友人」、「戦後の生活の苦労」、「家族との生活」などにまとめられる(第3-3-7表)。これは先の「子供の頃の記憶」と似ていると言えよう。

第3-3-5表 奄美以外での生活経験

生活した場所	人数	割合(%)
関 東	8	33.3
関 西	5	20.8
鹿 児 島	5	20.8
沖 縄	2	8.3
愛 知	1	4.2
熊 本	1	4.2
宮 崎	1	4.2
満 州	1	4.2
計	24	100.0

注) 人数は延べ人数である

第3-3-6表 渡米の契機

契 機	男	女	計	割合(%)
勉強不足を感じたため	1	1	2	14.3
より多くの収入を求めて	1		1	7.1
同級生からの影響	2		2	14.3
先輩の話	1		1	7.1
管理社会的な日本への失望	1		1	7.1
輸出会社にいたので	1		1	7.1
子供の頃のアメリカ観	1		1	7.1
親が渡米していたので		1	1	7.1
職場に米人が多かった		1	1	7.1
よく海外に旅行していた		1	1	7.1
結婚したら行けないので		1	1	7.1
な し		1	1	7.1
計	8	6	14	100.0

第3-3-7表 日本に関する記憶

	男	女	計	割合(%)
奄美の自然・友人	2	1	3	21.4
戦後の生活の苦労	2	1	3	21.4
家族との生活	1	1	2	14.3
な し	3	3	6	42.9
計	8	6	14	100.0

第4節 現在の仕事・生活・居住

既にみたように、被調査者の多くは渡米後既に15～30年を経過している。そこで次に、こうした年月を経た現在の居住・仕事等についてみよう。

1) 現在の居住地

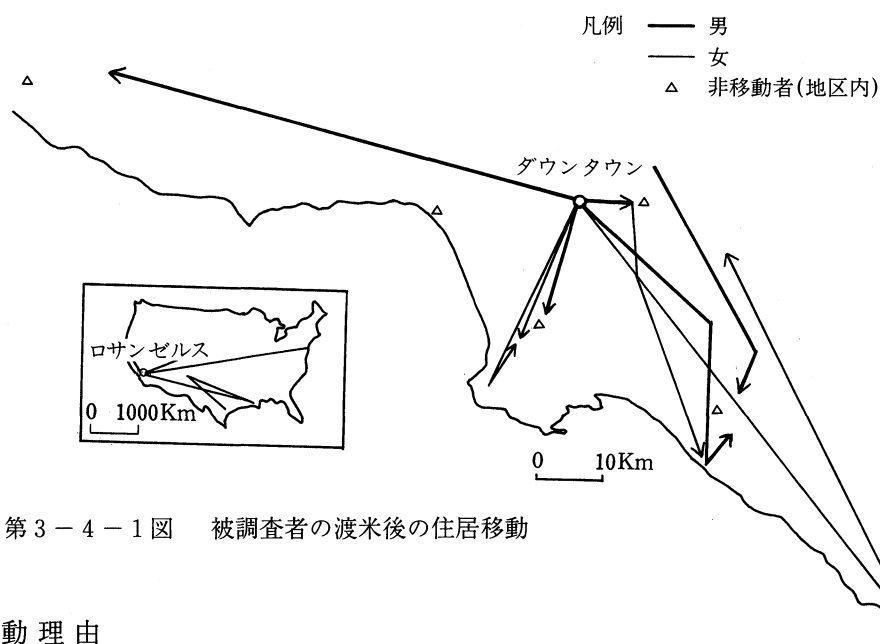
被調査者の現在の居住地をみると、ロサンゼルスカウンティ8、オレンジカウンティ4、ヴェンチュラカウンティ2であり、最大のロサンゼルスカウンティ内では、ガーデナ、トーランスなどの

南部方面に4, モントレーパークなど東部方面に3, 西部方面に1となっていて, 南方および東方にやや多い(第3-4-1表)。これは, ヴェンチュラカウンティを除くと, 既にみた会員全体の分布と同傾向であると言えよう。

第3-4-1表 現在の居住地		
カウンティ	人数	カウンティ内の特徴
ロサンゼルス	8	南部4, 東部3, 西部1
オレンジ	4	やや分散的
ヴェンチュラ	2	オックスナード, カマリロ
計	14	

2) 渡米後の住居移動

被調査者の渡米後の移動状況を第3-4-1図に示した。この図から次のことが言える。1) まず渡米後, ロサンゼルス以外の土地に住んだ者は女性が多く, 男性では企業の社員として渡米した者1人であった。2) 次に, ロサンゼルス内での非移動者が5名, 居住地を変えた者が9名(男5, 女4)でロサンゼルス内でも居住地を変えている者が多い。3) 移動傾向は, はじめはほとんどの者が中心部に住み, やがて, 周辺部(とくにオレンジカウンティなど)へ移るという傾向がみられる。



第3-4-1図 被調査者の渡米後の住居移動

3) 移動理由

渡米後における移動の理由をみると, 家庭の都合が最も多く, 仕事の都合がこれに次いでいて両者で8割以上を占める(第3-4-2表)。家庭の都合の内容は, 結婚や子供の誕生などライフサイクルの節目や転換点に応じたものであり, 離婚もここに含まれる。仕事の都合の内容は, 新たな仕事を始めた時などに, 仕事場の近くへ移住するということである。このように, ライフサイクルに対応した移住が半数近くを占めていて, 移住の主たる理由であることがわかった。

第3-4-2表 住居移動の理由					
理由	男	女	計	割合(%)	
家庭の都合	8	7	15	48.4	
仕事の都合	6	4	10	32.3	
学校の都合		4	4	12.9	
環境が悪かった	1		1	3.2	
不明		1	1	3.2	
計	15	16	31	100.0	

注) 移動の延べ回数による。

4) 現在の仕事

現在行っている仕事をみると、庭園、植木関係の仕事が最も多くなっているが、この他では建設関係と主婦が複数いるものの、かなり多様であると言えよう。ただ、全体的には自営業的なものが多いようだ(第3-4-3表)。

また、渡米後における仕事の変化をみると、仕事が変わっていない者が9名(男5名, 女4名)と多いが、男では3名(庭園師から植木園経営へ、会社のセールスから建設技師へ、会社勤務から自営業開始へ)、女では2名(会社勤務から自営店創設へ、サービスの仕事から会社経営へ)が仕事を变えている。

5) 家族構成

被調査者の世帯員数をみると2人から6人までに渡っているが、6人や5人世帯は少なく、8割近くが2～4人世帯であり、一世帯当りの平均世帯員数も3.5人とかなり少ないと言えよう(第3-4-4表)。全世帯とも

第3-4-3表 現在の仕事

	男	女	計	割合(%)
庭・植木関係	4		4	28.6
建設関係	2		2	14.3
レストラン・ヘルプ	1		1	7.1
自営+会社勤務	1		1	7.1
主婦		2	2	14.3
卸売会社経営		1	1	7.1
幼児教育		1	1	7.1
宝石店経営		1	1	7.1
秘書		1	1	7.1
計	8	6	14	100.0

第3-4-4表 家族構成

人数	男	女	計	割合(%)
1				
2	2	2	4	28.6
3	1	2	3	21.4
4	2	2	4	28.6
5	2		2	14.3
6	1		1	7.1
計	8	6	14	100.0

第3-4-5表 配偶者の出身地

	男	女	計	割合(%)	備考
日本 関東 東京	1	2	3	21.4	東京3
日本 関西 西	2		2	14.3	京都1, 大阪1
日本 九州	3		3	21.4	鹿児島2(奄美1), 熊本1
日本 その他	1	2	3	21.4	三重, 広島, 高知
外国 アメリカ		1	1	7.1	
外国 その他		1	1	7.1	タイ国
不明	1		1	7.1	
計	8	6	14	100.0	

配偶者がおり、これら夫婦以外の世帯員のほとんどは彼等の子供達であるが、「世帯主の母」も1件存在する。なお、ここでの世帯員数には入れなかったが、同居者として「フィアンセ」及び「お手伝いの人」のいる世帯があり、また逆に、子供はいるが現在同居していないのでここに入っていない世帯もあった。

次に、配偶者の出身地をみると、外国人との結婚は2人だけでいずれも女性であり、これ以外はすべて日本人同士の結婚であった(不明1を除く)(第3-4-5表)。そこで、日本人同士の結婚の内容をみると、関東や関西の大都市部出身者との婚姻が約半数、地方の出身者との婚姻が約半数であり、奄美出身者同士の婚姻は1件のみときわめて少ない。

以上のことは、奄美出身者としてのこだわりよりも、日本人としてのアイデンティティーの方の相対的優位性を示すものと言えるかも知れない。

6) 日常生活上の困難

第4節の最後に、日常生活で困ることについて尋ねた結果をみると、病気になったときにうまく説明できないことや医療費が高いことなどの医療関係のことが最大であった。次いで、良い仕事がない、雇ったアメリカ人が責任をもって働かないなどの仕事関係、および学校が勉強する場になっていないなどの教育関係があげられていた。

以上で全体の6割以上を占めており、ここに、渡米後の生活の問題点が見えてくるとみることができよう(第3-4-6表)。

第3-4-6表 日常生活上の困難

困ることの内容	人数	割合
医療(言葉, 費用, 食事)	5	27.8
仕事(良い仕事がない, など)	3	16.7
子供の教育(勉強しないなど)	3	16.7
英語力の不足	2	11.1
住宅	1	5.6
なし	4	22.2
計	18	100.0

注) 複数回答を含む

第5節 郷里との関係

本節では奄美出身者の郷里との関係及び、これに関連することについてみよう。

1) ロサンゼルス奄美会について

まず、ロサンゼルス奄美会について会員がどのように抱えているかをみると、会員相互の親睦に意義を見出す者が最も多く、次いで相互扶助、郷里との交流や協力となっている(第3-5-1表)。また、会に対する希望または要望として、回数や参加者数など会の更なる充実を求める声がいくつかあった。

第3-5-1表 ロサンゼルス奄美会について

会員の意見	人数	割合(%)
郷里を思い、親睦を深めはげまし合う会だ	5	8 44.4
良いことだ	3	
助け合い、相互扶助を	2	3 16.7
子供の教育にプラスだ(私達の心を子供に)	1	
奄美の発展に貢献できたら	2	11.1
回数を多く(年1回以上)、組織的に(会費など)	3	4 22.2
参加者を多く	1	
自分が若すぎて話が合わない	1	5.6
計	18	100.0

注) 複数回答を含む

2) 郷里との連絡

次に、手紙または電話による郷里との連絡の頻度をみると、半数が月1回以上連絡をとっており、年1回以上とするとほとんどの者となる(第3-5-2表)。また、物品を送る頻度をみると、約65%の者が何らかの品物を送っている(第3-5-3表)。

第3-5-2表 郷里との連絡状況

頻度	男	女	計	割合(%)
2回/月	3	1	4	28.6
1回/月	1	2	3	21.4
3~4回/年	3		3	21.4
1~2回/年	1	1	2	14.3
ほとんどしない		2	2	14.3
計	8	6	14	100.0

3) 郷里との人の交流

更に、人の往来を被調査者の滞在年数とのかかわりでみたが、帰国は滞在年数との関係よりも個人差の方が強いようである。帰国の回数は1～2年に1回の割で帰国する者もいなくはないが、逆に20年以上たっ

第3-5-3表 物品を送る頻度

頻 度	男	女	計	割合(%)
1回/月	1		1	7.1
3～4回/年	2	1	3	21.4
1～2回/年	3	2	5	35.7
な し	2	3	5	35.7
計	8	6	14	100.0

ていても1度も帰国していない者もあり、全体を平均すると約6年に1度の割で帰国するという結果となった。帰国の主な理由は法事や墓参などである。他方、日本からの訪問者については平均7年に1回の割合で来ており、その目的は家族・親類に対する訪問、面会や観光となっている。

以上を要約すると、人の往来については、外国であることもあってかそれほど頻繁に行われているとは言えないだろうが、連絡や物品送りはかなり頻繁に行われていると言うことができ、従って郷里との関係はかなり強いものがあると言うことができよう。

第6節 アメリカ生活に関する意見

本節では、アメリカ生活全般や自分の将来さらにはアメリカや日本の社会について、被調査者が渡米後の生活の中で感じとっている考え方や意見を把えてみたいと思う。

1) 渡米後最大の困難

第3-6-1表 渡米後最大の困難

困難やその逆の良かった事の把握は、移住者の生活の特色を把える上で有効な方法かと思われる。そこで、まず渡米後の最も困難だったことについてみると、当初仕事がみつからなかったこと、会話で苦勞したこと、友人がいなかったことなど最初の2～3年間における生活上の困難が数としては最も多く、半数にのぼった(第3-6-1表)。次いで、「離婚したとき」や「不法滞在」、「永住権がとれなかったこと」などの身分上の問題が来ており、とくに離婚は質的には最も重大な困難であろう。

困 難 の 内 容	男	女	計	割合(%)
最初の2～3年間、仕事になかったこと	3		3	18.8
最初の数年間の会話	2	1	3	18.8
最初の数年間、友人がいなかったこと	1	1	2	12.5
不法滞在で追われたこと	1		1	6.3
永住権がとれなかった	1		1	6.3
離婚したとき		3	3	18.8
新たな事業を始めたとき		1	1	6.3
な し	2		2	12.5
計	10	6	16	100.0

注) 複数回答を含む

第3-6-2表 渡米後の生活で良かったこと

良 かった 事 の 内 容	男	女	計	割合(%)
他人に干渉しないこと	3	1	4	22.2
品物が豊富で、安く生活しやすい	3	1	4	22.2
良い仕事があった	2	1	3	16.7
いろんな人との出会い	1	2	3	16.7
女性の権利が認められ、仕事ができる		2	2	11.1
子供の教育によい(のびのびできる)	1		1	5.6
広大な土地を車で自由に動ける	1		1	5.6
計	11	7	18	100.0

注) 複数回答を含む

2) 渡米後の生活で良かったこと

次に、アメリカでの生活の中で良いと思った事について尋ねた結果をみると、「他人に干渉しないこと」、「物価が安く、生活しやすいこと」が最も多く、「良い仕事があった」や「いろんな人と出会えた」が次いでおり、「女性の権利が高い」なども目立つ(第3-6-2表)。

全体として多様な長所が指摘されていると言えようが、しいてまとめると「生活がしやすく、個人が尊重されている」というようなことになろう。

3) 定住の意志

アメリカに定住するか否かの意志についてみると、半数以上が「定住する」または「定住する予定」と答えており、「日本へ帰国する」ことを考えている者はわずかであった(第3-6-3表)。しかし、未定の者も少なくなく、流動的な面も伺える。

これに関連して、米国籍の取得状況を見ると、既に取得している者は3割弱にすぎず、前表とは多少ずれがある(第3-6-4表)。とくに、女性にこのずれが顕著であるが、これは女性の場合米国籍の取得が必ずしも必要ではないためなのであろうか。

4) 将来の夢

将来の夢について尋ねた結果をみると、「今の仕事の充実・拡大」に夢をもっている者が6割と最も多く、次いで、もっと頻繁に安く「日本との往来」ができることを望む者が2割を占めている(第3-6-5表)。それぞれの仕事への専念を第一とし、その中で日本との往来を願う姿が浮び上がってくる。

5) アメリカ社会について

次に、渡米後の生活の中で抱んだアメリカ社会観について尋ねた。答は多様であったが、筆者はその結果を第3-6-6表の

第3-6-3表 定住の意志

意 志	男	女	計	割合(%)
定 住 す る	2	3	5	35.7
定 住 の 予 定	1	2	3	21.4
日 本 へ 帰 国 す る	2		2	14.3
今 は わ か ら な い	3	1	4	28.6
計	8	6	14	100.0

第3-6-4 米国籍の取得状況

取 得 状 況	男	女	計	割合(%)
取 得 し て い る	3	1	4	28.6
取 得 し て い な い	5	5	10	71.4
計	8	6	14	100.0

第3-6-5表 将 来 の 夢

将 来 の 夢	男	女	計	割合(%)
現在の仕事の充実・拡大	4	5	9	60.0
日本との行き来(安く)	1	2	3	20.0
世 界 旅 行	1		1	6.7
自然の中での生活	1		1	6.7
奄美の友人を呼ぶこと		1	1	6.7
計	7	8	15	100.0

注) 必ずしも1人1回答にあらず。

第3-6-6表 アメリカ社会について

アメリカ社会についての意見		人数	割合(%)
個 人 主 義	個人中心社会	3	27.3
	自由で公平	1	
	休暇を楽しむ	1	
	保険なしには生きられない	1	
競 争 社 会	競争と実力の社会	2	13.6
	言うべきことを言う	1	
非共同体的	犯罪、麻薬常用者が多い	2	22.7
	融通がきかない	1	
	教育には熱心でない	1	
	商売に金がかからない	1	
多 民 族	多民族・多人種	2	27.3
	移民に寛大	1	
	中間層が苦勞する	1	
	法律がつぎはぎだらけ	1	
	教育でよい社会を目指す	1	
そ の 他	経済基盤が安定	1	9.1
	清潔好き	2	
計		22	100.0

注) 複数回答を含む

ように整理した。この整理によると、答の6割以上が、個人主義的、競争的、非共同体的な社会と捉えており、また、3割弱が多民族社会と捉えている。前者は個人、競争、非共同体的の3要素を1つにまとめているが、各要素内の個々の答はこの各要素のわくを超えた内容を持つものもあり、バラエティーに富むが、あえてこのように整理したものである。体験的認識に基づく興味深い結果であると思われる。

6) 日本、奄美について

逆に、今まで生れ育った奄美や日本については、一定期間のアメリカでの生活を経た現在の時点でどのように感じているかを尋ねた。結果を第3-6-7表のように整理した。

全体としてみると、日本に関することと奄美に関することが半々であった。日本については、日本の良さと日本の問題点とに分けられ、前者は日本人は努力家であるなどの4件、後者は教育がみな同じだなどの3件であった。他方、奄美については提言が多かった。その1つは、広く世界に目を向けよという内容のものであり、もう1つは、奄美の発展や方向をめぐるものであったと言えよう。

7) 郷里との交流

次に、郷里との交流を取りあげ、これについてどのように思うかを尋ねたところ、「交流や協力をしたい」、「若者を呼び寄せたい」など前向きの答が半数以上あった(第3-6-8表)。この具体化はむずかしいかも知れないが、少なくともこうした気持があることだけは確認できよう。

8) 最近感ずること

最後に、最近感ずることとして全般的に意見を尋ねたところ、「なし」も多く、こ

第3-6-7表 日本、奄美について

	人数	割合(%)
日本の良さ		
経済・教育が発展し、中心がある	1	28.6
日本人は努力家だ	1	
日本人としてほこりに思う	1	
日本人はすばらしい	1	
日本の問題点		
ぜいたくに浮かれています	1	21.4
考え方がみな同じ	1	
組織の一員として行動	1	
奄美への提言など		
奄美の人は世界に目を向けよ	1	50.0
若者は海外へ	1	
アメリカへ移住すべし	1	
奄美に教育と産業を	1	
平和で住み易いが物価が高い	1	
自然破壊は残念	1	
都会人が失ったものをもっている	1	
計	14	100.0

第3-6-8表 郷里との交流

交流の内容	男	女	計	割合(%)
大切なので交流や協力をしたい	3	3	6	42.9
若者を呼び寄せたい	2		2	14.3
奄美の産業・将来を考えたい	2		2	14.3
方言・島唄を忘れないでいたい	1	1	2	14.3
仕事の個展を開きたい		1	1	7.1
墓参に行く程度		1	1	7.1
計	8	6	14	100.0

第3-6-9表 最近感ずること

内 容	男	女	計	割合(%)
奄美の自然保護	2		2	28.6
の人の生活	1		1	
日本の確一的教育	1		1	
日本人らしさの維持		1	1	14.3
故郷や友人を大切にすること		1	1	
帰国後の不安(高物価など)	1		1	7.1
子供との静かな生活		1	1	7.1
なし	3	3	6	42.9
計	8	6	14	100.0

れ以外の答も多様であったが、郷里や日本の現状に対する心配（4件）、日本人らしさの維持など自分達のあり方（2件）等の答が目立った（第3-6-9表）。とくに後者については、2世たちが育ちつつあり、今後ますます問われる問題となるであろう。

第4章 まとめと若干の考察

第1節 要 約

前章で述べた調査結果は、次のように要約できよう。

被調査者の多くは、日本経済の高度成長期に単身で渡米し、知人などに依存してはじめは借家等に住み、庭師やサービス関係の仕事を行っていた。とくに、最初の2～3年間は、言葉の問題や仕事だけの生活で、大変苦勞している。渡米の目的には2つのタイプがあるようで、その1つは、はじめから定住をはっきり意図していたケースであり、もう1つは、はじめは定住の予定はなかったが、渡米後の生活の中で長く住みつくようになったケースである。調査時点での被調査者の年齢は30代後半から50代前半、すなわち働き盛りの人々が多い。被調査者のほとんどは奄美で生れ、育っているが、10代から20代の時期に東京、大阪などの大都市部に移住しており、その環境の影響を受ける中で渡米している。

ロサンゼルスでは、はじめは中心部に居住したが、家族生活のライフサイクルに対応して次第に郊外に移り住むようになっており、現在はロサンゼルスカウンティの南部と東部、オレンジカウンティ、などに住んでいる者が多い。仕事は庭園、植木関係がやや目立つ他は多様であるが、全体として自営業的な仕事が多くなっている。全員、配偶者がいるが、子供は平均1.5人程度でそれほど多くはない。配偶者は日本人が大部分であるが、奄美出身者であることはむしろ少ない。日常生活の中では、医療費が高いことや病気になった際に言葉で苦勞することなど医療に関する問題をかかえている。

ロサンゼルス奄美会については、親睦、相互扶助、郷里との交流等の意義や方向性のあるものとして把握されており、奄美との直接的な人の往来はそれほど多くはないが、電話や手紙による連絡はかなり頻繁に行われていて、一定の結びつきがみられる。

渡米後最も困難だったことは、やはり最初の2～3年間の言葉、仕事などの問題であったが、質的には離婚がより深刻だったであろう。しかし、個人を尊重し、他人の生活に干渉しないことや、物価の安さ、物の豊かさなどによる生活のしやすさなど、アメリカでの生活の良い点も認識されている。これからもアメリカに定住し、今の仕事の発展や充実に夢を託している者が多く、また、日本との往来がもっと容易にできることが望まれている。

ところで、被調査者のアメリカ観についてみると、個人主義、競争社会という面と多民族社会という面とが指摘された。また、日本観については、日本人の長所は努力家だが、短所は皆が同じ考えで個がないとの指摘がなされ、奄美については、せまい中にとじこもらないで広く世界に目を向

けることを望む声が多かった。

以上が調査からわかったことの要約である。

第2節 若干の考察

最後に、いくつかの問題を指摘し、若干の考察を加えておきたい。

1) 移住の特色

第1に考えてみたいことは、この種の移住は様々な種類の移住がある中で、どういう種類のどういう特色をもつ移住なのかという点である。日本人の海外移住に限定して考えてみても、戦前における北米移住、戦後のブラジル移住などが大規模なものとしてあり、また、第2次大戦中には中国や南洋諸島への移住があった。さらに、近年における日本経済の国際的進出に伴う、世界諸地域に対する企業社員としての数年間の移住なども、従来の定住的なものとはやや型を異にする移住の一種とすることができよう。このほか、鹿児島県には、戦後アメリカ合衆国へ「難民として」渡った集団的移住などもある。

これらの移住と比べ、本稿で対象とした移住は、それほど集団的・組織的ではないという点が、一つの特色としてあげられるのではないだろうか。被調査者の中には積極的かつ目的意識的に渡米した者もいるが、やや偶然的にアメリカに住みつくようになった者もあり、また、国際結婚により渡米した者もいる。要するに統一的、集団的な移住ではなく、どちらかと言うと分散的、自然発生的な側面が強いと思われることである。

2) 被調査者の今後の方向性

第2に考えてみたい問題は被調査者の今後の方向についてである。既にみたように、被調査者は全体的に定住の意向が強い。しかしながら将来についてはまだ決めていないとの答も少なからずあったし、アメリカの国籍を既に取得した者も少数である。従って、依然として流動的な要素を含んでいるということもできよう。

彼ら自身のアメリカでの生活についてみると、既にみたように言葉や医療などの点で問題もなくはないが、他人に干渉しないことや生活のしやすさなど良い点も認めており、全体として今後ずっと住み続ける方向であると言えよう。さらに、彼らの今後の方向にとって、彼らの子供の存在が大きな意味をもっている。

彼らの子供すなわち2世の多くはアメリカ生れのアメリカ育ちであり、基本的にアメリカ人であると言える。彼らの中には日本語を学んでいる者もあり、日本語を知っているかも知れないが、学校など生活の基本は英語であり、日本で仕事に就くことは言葉の上でかなりの困難を伴うため、一般的にはアメリカで仕事に就くことになるだろう。このことが、彼等の親のアメリカへの定住化をより一層強めることにもなっている。

以上みたように、被調査者は全体としてアメリカでの定住化の指向性を持ち、アメリカ社会の中にとけ込んでゆく過程にあると言えよう。

3) 郷友会の性格

第3に考えてみたい問題は、ロサンゼルス奄美会の性格についてである。

日本の大都市部における奄美出身者の会は“シマ”(=集落)を単位として形成されており、その集合体として市町村レベルの会や島を単位とする会があり、その上に奄美会がある。さらに、奄美会の上部機関として鹿児島県人会が存在するが、関西の場合にみられるように、奄美会は県人会の下部組織の形を形式上はとっていても、実質的にはほぼ対等あるいはそれ以上の活動を行っており、県人会からはかなり独立的である。これらに対し、ロサンゼルス奄美会は、それ自身が最少単位である点及び、形の上でも県人会や日本人会の下部組織として位置づけられてはおらず、全く独自に存在している点が異なっている。

こうした活動形態の違いの最大の原因は、出身者数の量的な違いにあると思われる、少なくとも数十名以上の会員がいないと活発な会にはならないというような側面があるように思われるが、もう1つは、県人会の方の性格の違いも関係しているように思われる。すなわち、日本の大都市部における鹿児島県人会は、出身者の県内における地域的構成にそれほどかたよりが無いのに対し、ロサンゼルス県人会の方は穎娃町、知覧町方面の南薩出身者がかなりの多数を占めており、名前は県人会でも実態は南薩会のような特色をもっているという点である。なお、基礎単位の活動については、ロサンゼルス奄美会の方は年1回の親睦会を開く程度で、それほど活発であるとは言えないが、日本の大都市部にたくさん存在する各集落(字)郷友会の方も、活発な会からそうでない会まで様々であり、単純に比較することは適切でないだろう。

以上、郷友会の基礎単位、上部組織との関係、会の活動などについて比較検討した。

4) 調査の限界について

最後に、今回行った調査の限界について一言ふれておきたい。筆者はロサンゼルス及びその周辺に居住する奄美出身者全体の移住及びその後の生活の把握を意図したのであるが、既述のように調査票の回収率は33.3%と3分の1にすぎず、この結果から全体について判断するには無理があると思われることである。とくに、オクスナード周辺に多くの女性が居住しているが、この部分が欠けている点に限界があることを注意しなければならない。

さらに、筆者が対象とした調査者以外にも、すなわち奄美会員名簿に把握されていない奄美出身者が存在することも考えられ、こうした点も含めると、本研究の結果は二重の意味の限界を含んでいることになる。これらの限界の克服については、今後の課題としたい。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、ロサンゼルス奄美会の朝戸克己氏、西本和彦氏、中川四郎氏、黒木猛氏ほかの方々には様々な協力をいただいた。とりわけ黒木氏には二十数年間の在米生活体験に基づくアメリカ観、世界観など様々な教示を受けた。また、奄美会会員の多くの方々には調査に協力していただいた。さらに、鹿児島県人会の大原景雄氏、諏訪吉彦氏ほかの方々にも御協力をいただい

た。これらの方々に厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 拙稿 (1989) : 奄美出身者の動向と東京における Segregation の形成, 鹿児島大学教育学部研究紀要, 41巻. 拙稿 (1990) : 奄美出身者のアメリカ移住. 南太平洋研究, 10巻2号. 拙稿 (1991) : 関西における奄美郷友会の実態. 鹿児島大学教育学部研究紀要, 43巻. 拙稿 (1992) : 奄美大島宇検村民の移住. 鹿児島大学教育学部研究紀要, 44巻など.
- 2) R. J. Johnston ed. (1986): The dictionary of Human Geography. 2nd ed. PP. 436-438.
- 3) 現実の社会が提起する諸問題に積極的に「かかわって」いこうとする, 1960年代に欧米で抬頭した地理学の新しい働き。
- 4) J. D. Eyles, D. M. Smith (1978): Social Geography. American Behavioral Scientist 22-1, PP. 41-58.
- 5) 本書は1975年に「旅の小野津びと会」により編集, 発行されたもので, 非売品である。
- 6) 氏については, 鹿児島大学教育学部の島田俊秀教授から紹介していただいたので, 事前に連絡をとることができた。
- 7) 拙稿 (1990) 参照
- 8) 喜界島会の中心であった人物は, アメリカ小野津会会員の K. M. 氏で, 氏や若手の U. T. 氏などが中心となってこの会がつくられた。